

宮古島野原方言の代名詞と格助詞の関係について

人称代名詞となる代名詞に格助詞が接続した時の用法

島尻 澤一 (宮古島市史編さん委員会委員)

はじめに

これまで出版された宮古方言辞典や語彙集からは多くの示唆と学びを得た。編纂した方々が島の出身のネイティブスピーカーであり、研究者であることによって編纂された辞典や語彙集は言葉だけではなく宮古島の生活と歴史を仔細に取り入れた豊穰に満ちた辞典である。宮古方言は宮古島独特の中舌音 [ɾ] を含んだ言葉が多く、共通語との違いを強く感じ、覚えたり話したりすることが難しく敬遠する人が居る。しかし、学んで知ってみると新しい発見がある。今回は身近な宮古方言の代名詞が人称代名詞として用いられた場合に格助詞が接続した用法について検証してみたい。

野原方言の代名詞には次のような物がある。

〈人称代名詞〉

自称	わたくし。わたし。ぼく。	
方言	ban	
対称	あなた。きみ。	
方言	vva	
他称	近称	このかた。
	方言	kunnsu:。kanupitu。
	中称	そのかた。
	方言	unusu:。unupitu。
	遠称	あのかた。かれ。
	方言	kanusu:。kanupitu。
	不足称	どのかた。どなた。だれ。
	方言	to:
反射称	自分	
方言	du: nara	

〈人を表すことの出来る指示代名詞〉

	他 称			
	近 称	中 称	遠 称	不足称
人称	これ	それ	あれ	どれ
方言	kui	ui	kai	ndgi

I 人称代名詞に助詞の接続した時の用例

1. 助詞「を」の場合

〈格助詞「を」の機能と用例〉

- ・他動詞の動作の掛かる物を示す。
- ・多動性の動作・作用の目的・目標を指標する。
- ・自動詞にかかって「から」の意味を示す場合や自動詞の行われる場所、または動作の事情の及ぶ所を示す。参考文献「現代日本語法の研究・佐久間鼎」昭和 27 年

*野原方言に置いては格助詞「を」定型がなく接続する語彙の音節によっていろいろな音節に変形して表れる。

(1) 自称 [ban] 「わたし」について

〈一人称「わたし」[ban]に格助詞[o]「を」の付いた場合〉

〈わたし〉[ban] + 〈を〉[o] → [baru:] に変化する。

◎格助詞[o]〈を〉が接続した時の用例

- ・ baru: sa:ri: ikifi:ru
「私を連れて行ってください」
- ・ kaigadu baru: kafi: sīsī
「彼が僕を加勢する」

〈複数人称[banta]「わたしたち」格助詞[o]「を」の付いた場合〉

[ban] + [ta] → [banto:] に変化する。

◎格助詞 [o] 〈を〉が接続した時の用例

- banto: jatui fi:ru
「わたしたちを雇ってください」
- banto: usaina
「ぼくたちを馬鹿にするな」

(2) 対称 [vva] 「あなた」について

〈一人代名詞について〉

(2)-1. 対称代名詞 [vva] 〈あなた、君〉に格助詞 [o] 「を」の付いた場合については [vva] 〈あなた〉 + [o] 〈を〉 → [vvo:] となる。

◎ [vva] 〈あなた、君〉に格助詞 [o] 〈を〉が接続した時の用例

- vvo: kaiŋkai idja:sibusī:nu
「あなたを彼に会わせたい」
- vvo: funin nu:fi
「君を船に乗せる」

〈複数人称「あなたたち」の場合〉

(2)-2. 複数人称は [vvata] 〈あなたたち〉 + [o] 〈を〉 → [vvato:] になる。

- asipju: vvato: ja:ŋkai piraŋi
「遊んでいる君たちを家に帰す」
 - vvato: ugana:rafi: asipasi
「あなたたちを集めて遊ばす」
- 〈vva〉「あなた」 + 「た」 〈ta〉 → [vvata]
→ [vvato:] に変化する。

(3) 他称 [kai] 「かれ」について

〈一人代名詞について〉

(3)-1. 対称代名詞 [kai] 〈かれ〉について [kai] 〈かれ〉 + [o] 〈を〉 → [karju:] となる。 [kai] + [o] → [karju:] に変化する。

◎ [kai] 〈かれ〉に格助詞 [o] 〈を〉が接続した時の用例

- karju: abiŋ
「彼を呼ぶ」
- ja: kara karju: sa:rikisi
「家から彼を連れて来る」

〈複数人称 [kaita:] 「かれたち」の場合〉

(3)-2. 複数人称は 〈かれたち〉 [kaita:] + 〈を〉 [o] → [kaito:] になる。

- kaito: m:na ja:ŋkai piraŋi
「彼たちをみんな家に帰す」
- nivvju: kaito: ukusi
「寝ている彼たちを起こす」

(4) 疑問称 [to:] 「だれ」について

〈一人代名詞について〉

(4)-1. 対称代名詞 [to:] 〈だれ〉について

[to:] 〈だれ〉 + [o] 〈を〉 → [to:] となる。

◎ [to:] 〈だれ〉に格助詞 [o] 〈を〉が接続した時の用例

- to: juga tumju:rja:
「誰を探しているか」
- dumavvi: u:ja to: juga tudzŋn
su:digarasai
「迷っているのは誰を妻にするかだ」

〈複数人称「だれたち」 [to:ta:] の場合〉

(4)-2. 複数人称は 〈だれたち〉 [to:ta] + 〈を〉 [o] → [to:taju] になる。

- to:taju juga gu:n su:digaratidu najamju:
「誰たちを仲間にするか悩んでいる」
- ja:n to:taju u:tsigadigara siŋsain
「家に誰たちを置くか分からない」

*助詞「を」 [ju] に [juga] となっている [ga] は疑問符である。

(5) 反射代名詞 [nara] [du:] 「自分」について

〈一人代名詞について〉

(5)-1. 反射代名詞 〈自分〉 [nara] [du:] について

[nara] [du:] 〈自分〉 + [o] 〈を〉 → [du:ju]、
[naro:] になる。

◎ 〈自分〉 [nara] [du:] に格助詞 [o] 〈を〉が接続した時の用例

- ju:du kibaŋta:ti: 〈naro:〉 du:ju pumidi

「よく頑張った自分を褒めてやりたい」

• du:ju (nao:) kanasizza sisiso:

pitu:maidu kanasizza sisi

「自分を大切にする人は他人も大切にする」

〈複数人称「自分たち」 [du:ta:] [narata:]
の場合〉

(5)-2. 複数人称は [narata] [du:ta] 〈自分たち+ [o] 〈を〉 → [du:to:] [narato:] になる。

• idzaidi patarakadififjiba du:to:

〈narato:〉 tsikaifi:ru

*idzaidi patarakadififjiba narato:

tsikaifi:ru

「一生懸命働くので自分たちを使ってください」

• du:to: u:in sisiso: kimukagi pitusai

*narato: u:in sisiso: kimukagi

pitusai

「自分たちを応援する人は優しい人だ」

(6) 指示代名詞 [kui] 「これ」、[ui] 「それ」、
[kai] 「あれ」が人を表す時の助詞 [o] 「を」

のつく例

野原方言では、指示代名詞の中の事物を示す「これ」「それ」は人を表す代名詞としても用いられる。

指示代名詞が人を示す時

	他 称			
	近 称	中 称	遠 称	不足称
人称	これ	それ	あれ	どれ
方言	kui	ui	kai	ndgi

①近称「kui」「これ」に助詞[o]「を」がつく 用例

〈単称「これ、こいつ」に助詞に [o] 「を」がつく〉

[kui] + [o] 「を」 → [kurju:] となる。

• kurju: igziturafi

「これを怒ってやれ」

• baja: kurju: dasitja: uma:dga:n

「私はこれを友達とは認めない」

①-2<複数の人を示す場合>「これら、これたち」

[kui] 「これ」 + [ta] 「た」の形 [kuita] に

助詞「を」が接続する形 [kito:] で表れる

• kuito: buduizzu mi:ga sa:ri: iki

「これらを踊りを見せに連れて行く」

• kuito: munufo:ga sa:ri: iki

「これらを食事に連れて行く」

②中称「ui」「それ」に助詞[o]「を」がつく 用例

〈単称に助詞に [o] 「を」がつく〉

• vva: urju: adzapki: nivvafi

「君はそれをあやして寝かせなさい」

• urju: abiri: kifi kafi: jimi

「それを呼んできて手伝わせる」

②-2<複数形は [ui] 「それ」 + [ta] 「た」の

形「それたち、それら」[uita]に助詞[o]「を」

が接続する形 [uito:] で表れる。「それら」ともいう〉

• uito: uganai asipasī

「それらを集めて遊ばす」

• uito: tanumi:du bu:gizzuba: ibita:

「これらを頼んで砂糖キビは植えた」

③遠称「kai」「あれ」に助詞[o]「を」がつく 用例

*これは人を表す称代名詞 [kai] 「かれ」と同じ用法を表す。

〈単称に助詞に [o] 「を」がつく〉

• asipju: karju: sa:ri kifi patarakasī

「遊んでいるあれを連れてきて働かす」

• adzapkai karju: tuiku:ti tu:tsikiru

「兄にあれを取って来いと伝えなさい」

③-2 指示代名詞の遠称「kai」「あれ」の複数形

は「kai」「あれ」 + [ta] 「た」 → 「あれたち、

あれら」 「kaita」である。

• kaito: ama:rafi: tsikano:

「あれらを遊ばさないで仕事をさせる」

・nivvju: kaito: ukafi: sigutukai
ikasi

「寝ているあれらを起こして仕事に行かす」

④不定称 [ndzi] 「どれ」に助詞 [o] 「を」がつく用例

指示代名詞の不定称「ndzi」「どれ、どちら」に助詞「o」「を」がつく用例。

<単称に助詞に [o] 「を」がつく場合>

*「どちら」は「どれ」の丁寧な言い方。

・futa:tsi u:suga ndzu:ga sa:ri
pitatʃtʃa:

「二人いるがどちらを連れて行くか」

・samasika u:suga vva: ndzu(to:)ga
juminkai sisigamatajaba

「沢山居る中からどちら(だれ)を嫁に娶るか」

*指示代名詞の不定称「ndzi」「どれ、どちら」が人を表す時は [to] 「誰」となるのが常套である。

2. 格助詞「が」 [ga] の場合

(1) 自称 [ban] 「わたし」について

<一人称の [ban] 「わたし」の場合>

[ban] 〈わたし〉 + [ga] 〈が〉 → [n] が脱落して [baga] になる。

◎ [ban] 「わたし」に格助詞 [ga] 〈が〉が接続した時の用例

・野原方言には一つの文に係助詞 [du] 「ぞ」が他の助詞の後につくのは普通である。

・baga ma:tsiki ikadi

* agadu ma:tsiki ikadi

「私が一緒に行く」

・baga tumidi

* bagadu ma:tsiki ikadi

「僕が探す」

・baga ja:sifunai * bagadu ja:sifunai

「僕が腹減る」

*強調する意図がある場合は [ga] に [du] が接続し [gadu] になる。

・bagadu ma:tsiki ikadi

「私がぞ一緒に行くのだ」

・bagadu tumidi

「僕がぞ探すのだ」

・bagadu ja:sifunai

「僕がぞ腹減るのだ」

*格助詞 [ga] 「が」は主格でも所有格でも人以外を表す語に接続する場合は全て [nu] になる。

・innudu munu: faiju:

「犬が餌を食べている」

・pananudu sakju:

「花が咲いている」

・funinudu idipiï

「船が出て行く」

(1)-2. <複数人称 [banta] 「わたしたち」の場合

[banta] 〈わたしたち〉 + [ga] 〈が〉 → [bantaga] になる。

・bantaga vvaga kafi:juba: su:di

* bantagadu vvaga kafi:juba: su:di

「わたしたちが君の加勢はするよ」

・bantaga mi:ju:kja:ja to:mai turan

* bantagadu mi:ju:kja:ja to:mai turan

「僕たちが見張っているうちは誰も盗らない」

(2) 対称 [vva] 「あなた」について

<一人代名詞について>

(2)-1. 対称代名詞 [vva] 〈あなた、君〉について

[vva] 〈あなた〉 + [ga] 〈が〉 → [vvaga] になる。

◎ [vva] 〈あなた、君〉に格助詞 [ga] 〈が〉が接続した時の用例

・vvagadu kaiga adzana:

「あなたが彼の兄ですか」

• uman u: vvagadu ataīta:

「そこに居る君が当たりました」

(2)-2. <複数人称〈あなたたち、君たち〉[vvata]の場合>

複数人称は〈あなたたち〉[vvata] + [ga] 〈が〉 → [vvataga] になる。

• vvataga m:nafi: buitsika: ujakindu
nai

「あなたたちが皆で働けば金持ちになる」

• ugana:rju: vvatagadu kusisai

「集まった君たちが頼りです」

(3) 他称 [kai] 「かれ」について

<一人代名詞について>

(3)-1. 対称代名詞 [kai] 〈かれ〉について

[kai] 〈かれ〉 + [ga] 〈が〉 → [kaiga] になる。

◎ [kai] 〈かれ〉に格助詞 [ga] 〈が〉が接続した時の用例

• kaigadu vvaṅkai idjo:busi:nuti: u:ta:

「彼が君に会いたいと言っている」

• kurja: kaiga sisita: kutudara

「これは彼がやったことだ」

<複数人称「かれたち」の場合>

(3)-2. 複数人称は [kaita] 〈かれたち〉 + [ga]

〈が〉 → [kaitaga] になる。

• kaita:gadu бага ffanukjasai

「彼たちが私の子どもたちです」

• бага kibaraija kaitaga u: ukagisai

「私が頑張れるのは彼たちが居るからです」

(4) 疑問称 [to:] 「だれ」について

<一人代名詞について>

(4)-1. 対称代名詞 [to:] 〈だれ〉について

[to:] 〈だれ〉 + [ga] 〈が〉 → [to:ga] になる。

◎ [to:] 〈だれ〉に格助詞 [ga] 〈が〉が接続した時の用例

• to:gaga vvaga ffajaba

「誰が君の子どもか」

• kurju:ba: to:gaga mutfikisitarja:

「これは誰が持ってきたか」

(4)-2. <複数人称「だれたち」[to:ta:]の場合>

複数人称は [to:ta] 〈だれたち〉 + [ga] 〈が〉 → [to:taga] になる。

• kīno: to:tagaga mi:ga kisitaiba

「昨日は誰たちが訪ねてきたか」

• to:tagaga sikja:fiti piitarja:

「誰たちが散らかして行ったか」

(5) 反射代名詞 [nara] [du:] 「自分」について

<一人代名詞について>

(5)-1. 反射代名詞 [nara] [du:] 〈自分〉について

[du:] [nara] 〈自分〉 + [ga] 〈が〉 → [tu:ga].
[naraga] になる。

◎ 〈自分〉 [nara] [du:] に格助詞 [ga] 〈が〉が接続した時の用例

• naraga sisigamaranu kutu:ba: narafi:
sisi

* du:ga sisigamaranu kutu:ba: du:fi:
sisi

「自分がすべき事は自分です」

• naraga sisigamaranu kutu:ba: narafi:
kangairu

* du:ga sisigamaranu kutu:ba: du:fi:
kangairu

「自分がすべき事は自分で考える」

(5)-2. <複数人称「自分たち」[du:ta:][narata:]の場合>

複数人称は〈自分たち〉[du:ta] [narata] +
〈が〉 [ga] → [to:taga]. [narataga] になる。
用例を示す。

• kīno: du:tagadu kisita:

* kīno: naratagadu kisita:

「昨日は自分が来た」

・to:tagadu m:na fo:tarja:

*naratagadu m:na fo:tarja:

「自分たちが皆食べたか」

(6) 指示代名詞 kui「これ」、ui「それ」、kai「あれ」が人を表す時助詞 [ga] のつく例

〈野原方言における人稱としての指示代名詞〉

野原方言では、指示代名詞の中の事物を示す「これ」「それ」「あれ」は人を表す代名詞としても用いられ、これまでの文例が示すように主格「が」、連体格「の」どちらも助詞 [ga] が現れる。その他の指示代名詞が人を表す代名詞として用いられることはない。

①近称「kui」「これ」に助詞 [ga]「が」がつく用例

〈単称に助詞に [ga]「が」がつく場合〉

[kui] + 「ga」 → [kuiga] となる。

・kuigadu mutʃi piita:

「こいつが持って行った」

・kuiga siġutu: su:daka: бага su:di

「これが仕事をしなければ僕がするよ」

①-2<複数の人を示す場合>

[kui]「これ」+[ta]「た」の形 [kuita] に助詞 [ga] が接続する形 [kuitaga] で表れる

・kuitagadu buduī gamatajaba vva:

mi:ru

「これたちがぞ踊るので君は見なさい」

・kuitaga faittikara vva: faijo:

「これたちが食べてから君は食べてよ」

②中称「ui」「それ」に [ga] がつく

〈単称に助詞に [ga]「が」がつく場合〉

・uigadu mutʃipīīgamatajaba vva: jukui

「それがぞ持って行くので君は休め」

・uigadu mutʃipīīgamatajaba vva: jukuui

「それが持つて行くので君は休め」

・uigadu jumju: saiga

「それが 読んでいるね」

②-2<複数形は「それたち、それら」→ [ui]「それ」+[ta]「た」の形 [uita] に助詞 [ga] が接続する形 [uitaga] で表れる〉

・uitagadu m:na бага dusinukja:

「それたちがぞみんな私の友達だ」

・bu:giġuba: uitagadu m:na ibita:

「砂糖キビはこれたちがぞ皆植えた」

③遠称「kai」「あれ」に [ga] がつく

これは人を表す場合、前述した三人称代名詞「kai」「かれ」と同じような用法を表す。

・kaiga asipiga piitaibadu tavkja:u:ta:

「あれが遊びに行ったので一人で居た」

・kaigadu ffa: sa:ri: kifju:ta:

「あれがぞ子どもを連れて来ていた」

③-2 指示代名詞の遠称「kai」「あれ」の複数形

は「kai」「あれ」+taの「kaita」「あれたち」であるが、野原方言では三人称代名詞と語彙が同じ「kai」「かれ」で機能としても用法としてもおなじである。複数な物を表現する語彙としては使用されない。

④不定称 [ndzi]「どれ」に [ga] がつく

指示代名詞の不定称には「ndzi」「どれ、どちら」には、助詞「ga」と助詞「nu」のどちらもつく。一般的には[to:]「だれ」が用いられる。

①ndzigaga vvaga ffajaba

「どちらが君の子どもか」

②ndzinuga vvaga ffajaba

「どちらが君の子どもか」

①ndzigaga vvaga adzajaba

「どちらが君の兄か」

②ndzinuga vvaga adzajaba

「どちらが君の兄か」

3. 格助詞「の」の場合

(1) 自称「わたし」 [ban] について

*格助詞「の」が人を表す語彙に接続する場合はすべて [ga] になる。

〈一人称「わたし」 [ban]の場合〉

〈わたし〉 [ban] + 〈の〉 [ga] → [n] が脱落して [baga] になる。

◎ [ban] 「わたし」に格助詞〈の〉 [ga]が接続した時の用例

• baga anna: ukīna:ŋkaidu pīita:

「私の母は沖縄に行きました」

• kamakara kīsīso: baga adzasai

「向こう生から来るのは僕の兄だ」

• adzaga muduri kīsīzzu matsī

「兄の帰りを待つ」

• fu:ga buduīfimaikja:gami mi:

「お爺さんの踊り終わるまで見る」

(1)-2. 〈複数人称「わたしたち」の場合〉

〈わたしたち〉 [banta] + 〈に〉 [n] → [bantān] となる。

• bantaga nara:sīnudu janaka:dara

「私たちの親は躰が厳しいのだ」

• bantaga mudurikīsīzzu matfu: ujata: fuwa:fidu u:

「私たちの帰りを待つ親は心配している」

(2) 対称「あなた、君」 [vva] について

〈一人代名詞について〉

(2)-1. 対称代名詞〈あなた、君〉 [vva] について

〈あなた〉 [vva] + 〈の〉 [ga] → [vvaŋ] になる。

* 人称代名詞に接続するので助詞「の」は「が」 [ga]になる。

◎ [vva] 〈あなた、君〉に格助詞〈の〉 [ga]が接続した時の用例

• vvaga na:ja no:tiga andza:

「あなたの名前は何ですか」

• kaman mi:rai u:so: vvaga ja:dara

「向こうに見えるのは君の家だ」

(2)-2. 〈複数人称「あなたたち、君たち」 [vvata] 格助詞 [の] 「ga」が接続する場合〉

複数人称は〈あなたたち〉 [vvata] + 〈の〉 [ga] → [vvataga] になる。用例を示す。

• vvataga sīŋkanukja:ja gammarju:

tfa:ndu ūifū:

「あなたたちの仲間は悪さばかりしている」

• kamakara kīsīso: vvataga ja:dina:

「向こうから来るのは君たちの家族か」

(3) 他称「かれ」 [kai] について

〈一人代名詞について〉

(3)-1. 対称代名詞〈かれ〉 [kai] について

〈かれ〉 [kai] + 〈の〉 [ga] → [kaiga] になる。

◎ [kai] 〈かれ〉に格助詞〈の〉 [ga]が接続した時の用例

• kaiga uja: kitsība:sai

「彼の親ととても厳しい」

• kaiga pamaīŋkaija kanamaīnu sagaī

「彼の働きには感心する」

(3)-2. 〈複数人称「かれたち」に格助詞[の]「no」

「が」の接続する場合〉

〈かれたち〉 [kaita] + 〈の〉 [ga] → [kaitaga] になる。用例を示す。

• taitagā ujata: juima:rudu ūifū:

「彼たちの親は結をやっている」

• vvataga ūifū:kuto kaitatu gu:saiga

「君たちのやってることは彼たちと変わらない」

(4) 疑問称「だれ」 [to:] について

(4)-1. 対称代名詞〈だれ〉 [to:] について

〈だれ〉 [to:] + 〈の〉 [ga] → [to:ga] になる。

◎ [to:] 〈だれ〉に格助詞〈の〉 [ga]が接続した時の用例

• vvaga nu:rikīsīta:so: to:ga

kurumajaba

「君の乗ってきたのは誰の車か」

• vvaga mipana: to:ga mipana nga

n:dakari: u:rja:

「君の顔は誰の顔に似ているか」

(4)-2. <複数人称「だれたち」 [to:ta:] の場合
>

複数人称は <だれたち> [to:ta] + <の> [ga]
→ [to:taga] になる。用例を示す。

• vva: totaga ja: ŋkaiga ikitarja:

「君は誰たちの家へ行ったか」

• to:taga aĩmunuga mattobagara sĩaĩp

「誰たちの言う事が正しいか分からない」

(5) 反射代名詞「自分」 [du:] [nara] について
<一人代名詞について>

(5)-1. 反射代名詞 <自分> [du:] [nara] について

<自分> [du:] [nara] + <の> [ga] → [tu:ga]
[naraga] になる。

◎ <自分> [nara] [du:] に格助詞 <の> [ga]
が接続した時の用例

• du:ga kutu:ba: du:fi: sĩaĩ

*naraga kutu:ba: nara:fi: sĩaĩ

「自分の事は自分です」

• du:ga sĩaĩgamatanu kutu:ba

du:fi:kangairu

*naraga sĩaĩgamatanu kutu:ba: nara:fi:
kangairu

「自分のすべきことは自分で考える」

(5)-2. <複数人称「自分たち」 [du:ta] [narata]
の場合

複数人称は <自分たち> [du:ta] [narata] +
<の> [ga] → [to:taga] . [narataga] にな
る。用例を示す。

• du:taga sīguto: m:naga tamindu
narju:

*narataga sīguto: m:naga tamindu
narju:

「自分たちの仕事は皆の為になる」

• du:taga kĩaĩkuto: du:taga ŋikininsai

*narataga kĩaĩkuto: narataga

ŋikininsai

「自分たちが頑張ること自分たちの使命だ」

(6) 指示代名詞 [kui] 「これ」、[ui] 「それ」、
[kai] 「あれ」が人を表す時は助詞 [ga] 「が」
のつく例

野原方言では、指示代名詞の「これ」「それ」
「あれ」に助詞 [の] 「no」が接続する場合は
助詞は [nu] 「ヌ」になるが人を表す場合は [ga]
「ガ」になる。

① 近称「kui」「これ」に助詞 [の] 「no」が [ga]
「が」となっていく用例

<単称の場合 [kui] に助詞 [nu] 「の」→ [ga] 「が」
になる>

◎ [kai] 「かれ」に格助詞 [の] 「no」がつくと
[kui] + [nu] → [kuiga] となる。用例を
示す。

• kuiga pammaijudu mutfi ikita:

「これの弁当を持って行った」

• kuiga sīgutu:ba: su:daka: bagadu
su:di

「この仕事はしなければ僕がするよ」

①-2 <複数の人を示す場合>

[kui] 「これ」 + [ta] 「た」の形 [kuita] に
格助詞 [no] 「の」が接続する形は [ga] で表
れる

• kuitaga buduĩzzu vva: mi:ru

「これたちの踊るのを君は見なさい」

• kuitaga fo:munu: sika:i

「これたちの食べ物を準備する」

◎ 中称「ui」「それ」に助詞 [ga] がつく用例
<単称の場合>

• uiga mutfiĩĩgamatanu munu:ba: vva:
mutfipiri

「それの持っていく物は君が持って行け」

• uiga adzo: tumiku:

「それの兄を探してこい」

②-2 <複数形は [ui] 「それ」 + [ta] 「た」の

形 [uita] 「それたち」に助詞 [nu] が接続する形は [ga] 「が」で表れる>

◎用例を示すと次のようになる。

・ uitaga m:na: бага dusinukja:dara

「それたちのみんなは私の友達だ」

・ sapu:ba: m:na uitaga paripkaidu

ibita:

「苗は皆これたちの畑に植えた」

③遠称 [kai] 「あれ」に助詞 [ga] がつく用例

③-1<単称の場合>

[kai] 「あれ」は人を表す場合、前述した人称代名詞 [kai] 「かれ」と同じような用法を表す。用例を示す。

・ kaiga asipijo:ju mi:tsika:

umufiffisaiga

「あれの遊び方を見ると面白い」

・ kaiga ffa: bo:tfirajabadu adzapkikani
sisi

「あれの子どもは腕白であやすのに苦勞する」

③-2 指示代名詞の遠称 [kai] 「あれ」の複数形

は [kai] 「あれ」 + [ta] 「た」 → 「あれたち」 「あれら」 [kaita] に [ga] が付く場合の用例。

・ kaitaga ja:dja: upo:dasai

「彼たちの家族は多い」

・ kaitaga ja:ja ka:raja:sai

「彼たちの家は瓦屋です」

(4) 不定称 [ndzi] 「どれ」に助詞 [nu] がつく
用例

野原方言に置いて指示代名詞の不定称 [ndzi] 「どれ」は人称代名詞としては用いることはない。人の子どもに対していう場合

・ ndzinu ffajaba 「どれの子どもか」

とは表現しない。ただし、人以外を表現する所有格助詞 [no] 「の」が人を表す場合所有格助詞 [ga] 「が」として表れるので混乱を起こす。

・ ndzinuga vvaga ffajaba 「どれが君の子どもか」

人を表す用法として一般的に [to] 「だれ」を用いることはない。

<指示代名詞の不定称には [ndzi] 「どれ、どちら」には、助詞 [ga] と [nu] のどちらもつく>

格助詞の「ga」と「nu」は前に位置し、後ろにある「ga」は疑問を示す係助詞である。「ndzi」 「どれ」が人を示す場合も物を示す場合も関係なく格助詞は「ga」と「nu」の両方接続できる。一般的には人を示す不定称には人称代名詞の疑問詞はほとんど「to:」 「だれ」が用いられる。しかし、「ndzi」 「どれ、どちら」を用いても違和感はなく意味は通じる。

<不定称指示代名詞が物を示す場合>

・ ndzinuga vvaga nu:majaba

*ndzigaga vvaga nu:majaba

「どれが君の馬か」

・ ndzigaga vvaga kurumajaba

*ndzinuga vvaga kurumajaba

「どれが君の車か」

<不定称指示代名詞が人を示す場合>

・ ndzigaga kaiga ujjaba

*ndzinuga(to:gaga) kaiga ujjaba

「どれが彼の親か」

・ ndzigaga vvaga ffajaba

*ndzinuga(to:gaga) vvaga ffajaba

「どちらが(だれが)君の子どもか」

4. 格助詞「に」の場合

<格助詞「に」の用法>

野原方言における格助詞「に」は用法によって [n]、 [ɲkai] の両方が表れる。

まず国語における格助詞「に」の用法を参考文献から示す。

動作の行われる時を指定する。

・ 動作、作用の行われ、成立する場所を指定する。

- ・動作の帰着する場所を示す。
- ・動作の目的を示す。
- ・動作、作用の原因、理由を示す。
- ・動作、作用の結果を示す。
- ・動作、感情の向けられる対象を示す。
- ・動作、作用を受ける場合の動作の主や使役の動作の対象を示す。

- ・動作、作用の行われ方、存在する状態を示す。
- ・比較の起点、基準を示す。参考文献「岩波講座・文法7・西田直敏」1977年

ここでは野原方言における格助詞「に」「n」が人の行動に関わって使用される用法について検証したい。野原方言に於いては用法は限定的で話し手が拠点で移動しない思考行動に限定される。野原方言における日本語助詞「に」はほとんどが格助詞「へ」[ɲkai]で対応する。

◎人称代名詞に格助詞「に」の接続が野原方言で[ɲkai]になる時の用例

- ・ti:nu p̄iso: baruɲkai miɸi
「掌の平を私に見せる」
- ・naraga kaɸi:ju piɸuɲkai tanum
「自分の手伝いを人に頼む」
- ・tabiɲkainu ni:ju ti:ɲkai muts̄i
「旅への荷物を手に持つ」
- ・awati: funiɲkai nu:i
「慌てて船に乗る」(乗るために急いで離れている船まで移動して乗る場合)
- ・awati: funiɲ nu:i
「急いで船に乗る」(船の袂に居て出ようとする船に直ぐ乗る場合)
- ・nu:maɲkai nu:i
「馬に乗る」(馬に乗るための行動に主眼に置く表現)
- ・nu:man nu:i
「馬に乗る」(馬に乗ったという事象に主眼を置いた表現)

(1) 自称「わたし」[ban]について

〈一人称「わたし」の場合〉

〈わたし〉[ban] + 〈に〉[n] → [barun] になる。

◎ [ban] 「わたし」に格助詞〈に〉[n]が接続した時の用例

- ・baruɲ mutas̄its̄ika: tudukidi
「私に預けたら届けるよ」

〈*baruɲkai mutas̄its̄ika: tudukidus̄i〉と言うことも自然である。

- ・baruɲ fi:ts̄ika: atukara izzu: mutɸiku:di

「私に呉れば後から魚を持ってくる」

〈baruɲkai fi:ts̄ika: atukara izzu: mutɸiku:di〉と言うことも自然である。

(1)-2. 〈複数人称「わたしたち」の場合

〈わたしたち〉[banta] + 〈に〉[n] → [bantān] になる。

- ・bantān miɸits̄ika: to:ɲkaimai andzadja:n

「私たちに見せれば誰にも言わない」

〈bantānkai miɸits̄ika: ①to:ɲkaimai andzadja:n〉とも言える。しかし[to:ɲkaimai]を[to:nmai]と言う事は出来ない。

- ・bantān turas̄its̄ika: kaisadga:n

「私たちに渡すと返さない」

〈bantānkai turas̄its̄ika: kaisadga:n〉と言っても不自然ではない。

〈一人称の場合〉

(2) 対称「あなた、君」[vva]について

〈一人代名詞について〉

(2)-1. 対称代名詞〈あなた、君〉[vva]について

〈あなた〉[vva] + 〈に〉[n] → [vvaɲ] になる。

◎ [vva] 〈あなた、君〉に格助詞〈に〉[n]が接続した時の用例

- ・vvaɲ fi:bus̄i:nu mununudu a:

<vvaŋkai fi:busi:nu mununudu a:>とも言う。

「あなたに上げたい物がある」

• dainu va:biŋ utsiki

• vvan dainu vabiŋkai utsikasi

「君に台の上に置いてもらう」

*事態が起点から移動する動詞を使用した次の用例では格助詞「に」[n]は使えず「ŋkai」になる

• vvaŋkai panasitsika: pisugaidusi

「君に話すとみんなに広がる」

• vvaŋkai tivvi: turasitsika: javvidusi

「君に投げて渡すと壊れる」

(2)-2. 複数人称「あなたたち、君たち」[vvata]の場合

複数人称は〈あなたたち、君たち〉[vva] + 〈た〉[ta] → [vvata] になる。

• vvataŋ mutasitsika: rakundu nai

「あなたたちに持たすと楽になる」

<vvataŋkai mutasitsika: rakundu nai>と言う言い方に(物を持たせて相手に送り届けると安心するという意図が話し手にある場合)に「に」が[ŋkai]になる。

• kisijo:n vvataŋkai tu:tsikita:sugadu to:mai ku:ŋ

「来るように君たちに伝えたいけど誰も来ない」

(3)他称「かれ」[kai]について

<一人代名詞について>

(3)-1. 対称代名詞〈かれ〉[ban]の場合

〈かれ〉[kai] + 〈に〉[n] → [kain] になる。

◎ [kai] 〈かれ〉に格助詞〈に〉[n]が接続した時の用例

• бага fəfinnudu kain fi:busi:nu

「私の写真を彼に差し上げたい」

• ma:izzu tivvi:du kain turasi

「毬を投げて彼に渡す」

• kain adzikitsika: kimujasimunosai

「彼に預ければ安心です」

• m:naŋkainu sisaimunu:ba: kaindu turasita:

「みんなへの伝言は彼に渡した」

(3)-2. <複数人称「かれたち」の場合>

複数人称は〈だれたち〉[to:ta] + 〈に〉[n] → [to:tan] になる。

• kaitaŋ no:jumai fi:na

<kaitaŋkai no:jumai fi:na>とも言う。

「彼たちに何も上げるな」

• kaitan fi:muno: no:mai ja:ŋ

<kaitaŋkai fi:muno: no:mai ja:ŋ>とも言う。

「彼たちに上げるものは何もない」

(4)疑問称「だれ」[to:]について

<一人代名詞について>

(4)-1. 対称代名詞〈だれ〉[to:]について

〈だれ〉[to:] + 〈に〉[n] → [toon] [to:n] になる。

◎ [to:] 〈だれ〉に格助詞〈に〉[n]が接続した時の用例

• to:ŋ fi:rubaga dzo:ka:gara sisaiŋ

<to:ŋkai fi:rubaga dzo:ka:gara sisaiŋ>とも言う。

「誰にあげれば良いかわからない」

• ffo: to:ŋ dakafimidigatidu gangiju:

<ffo: to:ŋkai dakafimidigatidu gangiju:>とも言う。

「子どもは誰に抱かせるか考える」

*[baga]、[gatidu]の「か」[ga]は疑問終助詞である。

(4)-2. <複数人称「だれたち」[to:ta]の場合>

複数人称は〈だれたち〉[to:ta] + 〈に〉[n] → 〈誰たちに〉[to:tan] になる。

• to:taŋ mifirubaga dzo:karja:

<to:taŋkai mifirubaga dzo:karja:>とも言う

える。

「誰たちに見せれば良いか」

・baga idjo:so: to:tanga narja:

「僕が会うのは誰たちになるか」

(5) 反射代名詞「自分」 [du:] [nara] について

<一人代名詞について>

(5)-1. 反射代名詞 <自分> [du:] [nara] について

<自分> [nara] [du:] + <に> [n] → <自分に> [naran]

<自分に> [du:] + <に> [n] → [du:n]

◎ <自分> [nara] [du:] に格助詞 <に> [n] が接続した時の用例

・du:n firain munu: pītupkai tanumna
*naran firain munu: pītupkai tanumna
「自分に出来ないこと他人に頼むな」

・dzo:dzin firainna du:ndu fikininnaa:
*dzo:dzin firainna nara:ndu fikininnaa:
「自分に責任がある」

(5)-2. <複数人称「自分たち」 [du:ta:] の場合>

複数人称は <自分たち> [du:ta] [narata] * [du:ta:] + <に> [n] → [du:tan] になる。

・du:tan pazzu kakasina

<du:tankai pazzu kakasina>とも言える。

「自分たちに恥をかかせるな」

・fifijavta:ja barun tajanu
na:ttamibasai

「失敗したのは自分たちに力がなかったからです」

*[narata] + <に> [n] → [naratan] になる。

・naratantfa:kadu naggizza fimju:

「自分たちにだけ難儀させてる」

・naratan sunnu na:daka: dgo:bunna: 「自分たちに損がなければよいのか」

(6) 指示代名詞 [kui] 「これ」、[ui] 「それ」、[kai] 「あれ」が人を表す時助詞 [n] 「に」

のつく例

野原方言では、指示代名詞の中の事物を示す「これ」「それ」「あれ」は人を表す代名詞としても用いられる。

<指示代名詞が人を示す時>

① 近称「kui」「これ」に[n]「に」がつく

<一人称に [kui] + 助詞 [n] 「に」がつく例 [kui] + [n] → [kuin] となる。

・kuindu mutfi pirasita:

「これに持って行かせた」

・kuin sīgutu: fimiro:mai maija mi:n
「これに仕事をさせても捗らない」

①-2<複数の人を示す場合>

[kui] 「これ」 + [ta] 「た」の形 [kuita] に助詞 [n] が接続する形 [kuitan] で表れる

・kuitan budurasitsika: m:nagadu mi:sai
「これたちに踊らせたならみんなが見る」

・kuitan fi:ttikara vva: fajo:
「これたちに食べさせてから君は食べてよ」

② 中称「ui」「それ」に[n]「に」がつく例

・uinna mutasadana vva: mutfipiri

「それには持せずに君が持って行け」

・uinumasī
「それに読ませる」

②-2<複数形は [ui] 「それ」 + [ta] 「た」の形 [uita] 「uita」に助詞 [n] 「に」が接続する形 [uitan] 「それたち」で表れる>

・uitandu m:naga usaraita:
「それたちにみんなが馬鹿にされた」

・bu:gijuba: uitandu m:na ibifimita:
「砂糖キビはこれたちに皆植えさせた」

③ 遠称「kai」「あれ」に助詞[n]「に」がつく用例

遠称 [kai] 「あれ」は人を表す場合、前述した称代名詞 [kai] 「かれ」と同じような用法を表

す。

◎ [kai] 「あれ」に格助詞 [の] 「no」が付く用例。人称代名詞になるので接続する格助詞は [nu] 「の」が [ga] 「が」になる。

- ・ kaidu asipiga sa:ri: ikaita:
「あれに(かれに)遊びに連れて行かせた」
- ・ kaidu ffo: adzikita:
「あれに(かれに)子どもを預けた」

③-2 指示代名詞の遠称「kai」「あれ」の複数形は「kai」「あれ」+ [ta] 「た」→「あれたち」「あれら」「kaita」である。

- ・ kaitan(kai) idja:no:n sisi
「あれらに(かれたちに)会わないようにする」
- ・ kaitandu akufiraita:
「あれたちに(かれたちに)虐められた」

④不定称 [ndgi] 「どれ」に [n] 「に」がつく用例

指示代名詞の不定称に「ndgi」「どれ、どちら」に助詞[n]「に」がつく用例。

普通は指示代名詞の不定称は人を表す表現に用いる要素はなく [ndgi] 「どれ」に替わって [to:] 「だれ」が用いられる。

- ・ ndgin (to:n) dakairubaga nakijamja:
「どれに(だれに)抱かれた方が泣き止むか」
- ・ ffo:ba: ndgin(to:n)ga adzikigamatajaba
「子どもはどれに(だれに)預けるか」

○日本語における動作の目的を表す助詞「に」は野原方言では助詞 [ga] になる>

<助詞「に」が [ga] になる用例>

- ・ adzatudu buduizu mi:ga ikju:ta
「兄と踊りを見に行っていた」
- ・ pindzanu fusa kaiga ikadaka:narap
「山羊の草刈りに行かなければならない」
- ・ ja:sifu narju:iba asamunu: fo:ga ikadi
「腹が減ったので朝ご飯を食べに行こう」

- ・ pja:pja:ti: annatu idjo:ga piri
「早く母さんと会いに行きなさい」
- ・ baja: dzinnu' tuigadu kisita:
「私はお金を取りに来た」
- ・ dzu: afu: fo:ga ikadi
「さあ昼ご飯を食べに行こう」
- ・ fu:gadu ko:ta: nu:mo: mi:ga mmjaiju:
「祖父がぞ買った馬を見にお見えになっている」

5. 格助詞「へ」の場合

<格助詞「へ」の用法>

- ・ 日本語に文語に置いて格助詞「へ」は、動作の表す動作の進行する目標所在の方向を示す。
- ・ 場所を指すという漠然としたものでそちらの方という方角を指して言うにとどまる。参考文献「現代日本語法の研究・佐久間 鼎」
- ・ 名詞「辺」から転成した助詞で、名詞「辺」が中心から遠い端、末を意味するところから現在いる地点から遠く離れた地点に向かって進む場合に用いられる。参考文献「岩波講座・文法7・西田直敏」

(1) 自称「わたし」 [ban] について

<一人称「わたし」の場合>

〈わたし〉 [ban] + 〈へ〉 [pkai] → [barunkai] になる。

*ある場所から別の場所に移動する、人や物が移動するような進行的意義が顕著な場合に〈へ〉

[pkai] を用いる

(わざわざ移動して会いに来る場合)

◎ [ban] 「わたし」に格助詞〈へ〉 [pkai]が接続した時の用例

- ・ barunkai idjo:ga kisī
「私へ会いに来る」
- ・ barunkai tsitu: mutfikisi
「私へ(に)お土産を持って来る」
- ・ kainkai sisairuti: barunkai tu: tsiki
「彼へ(に)伝えるように私へ言づける」

(1)-2. <複数人称「わたしたち」の場合>

<わたしたち [banta]> + <た> [ta] → [banta]
になる。

• kaiga bantankainu kafi:ja
maifukabaka:isai 「彼の私たちへへの援助は感謝
しかない」

• bantankai tigamju: ukurja:mai
pito:nudu firain 「私たちへ(に)手紙を送っ
ても返事が出来ない」

(2) 対称「あなた」 [vva] について

<一人代名詞について>

(2)-1. 対称代名詞 <あなた、君> [ban] につい
て

<あなた> [vva] + <た> [ta] → [vvata]
になる。

◎ [vva] <あなた、君> に格助詞が <へ> [ɲkai]
に接続した時の用例

• vvanakai pumimunuizzu ukuradi
「あなたへ(に) 賛辞を送ります」
• urja: vvaga baruŋkai fi:ta: munusai
「それは君が僕にくれた物です」

(2)-2. <複数人称<あなたたち、君たち> [vvata]
の場合>

複数人称は <あなたたち> [vvata] + <た> [ta]
→ [vvata] になる

• vvatanakai muŋku: aizzadi
「あなたたちへ文句を言いたい」
• kutu: ukusita: vvatanakaidu
batafusarju:
「問題を起こした君たちへ(に) 腹が立つ」

(3) 他称「かれ」 [kai] について

<一人代名詞について>

(3)-1. 対称代名詞 <かれ> [kai] について
<かれ> [kai] + <へ> [ɲkai] → [kainkai]
になる。

◎ [kai] <かれ> に格助詞 <へ> [ɲkai] が接
続した時の用例

• kainkai tigamju: ukuĩ 「彼へ(に) 手紙を
送る」

• kainkaidu ma:izzu tuvta:
「彼へ毬を投げた」

(3)-2. <複数人称「かれたち」の場合>

複数人称は <かれたち> [kaita] + <た> [ta]
→ [kaitankai] になる。

• kaitankai fa:simuno: no:mai ja:ŋ 「彼
たちへ(に) 食べさせるものは何もない」

• tsito: kaitankainu munumai ari:na: 「土
産は彼たちへの物もあるか」

(4) 疑問称「だれ」 [to:] について

<一人代名詞について>

(4)-1. 対称代名詞 <だれ> [to:] について

<だれ> [to:] + <た> [ta] → [to:] にな
る。

◎ [to:] <だれ> に格助詞 <へ> [ɲkai] が接
続した時の用例

• kurja: to:ɲkai fi:gamatanu munujaba
「これは誰へ(に) あげる物か」
• to:ɲkai andzibaga fi:fu:rja:
「誰へ(に) 話せば分かるか」

(4)-2. <複数人称「だれたち」 [to:ta:] の場合
>

複数人称は <だれたち> [to:ta] + <た> [ta]
→ [to:tanakai] になる。

• to:tanakai idjaibaga panasizza narja:
「誰たちへ(に) 遭えば話ができるか」
• to:tanakai turafibaga dzokaiba
「誰たちへ(に) 渡せば良いか」

(5) 反射代名詞「自分」 [du:] [nara] につい
て

<一人代名詞について>

(5)-1. 反射代名詞 <自分> [du:] [nara] につ
いて

[nara] [du:] + <へ> [ɲkai] → [narankai]
[du:ɲkai] になる。

◎〈自分〉[nara] [du:]に格助詞[ŋkai]「へ」が接続した時の用例

・du:ŋkai mato:ban ikīdi

*naraŋkai mato:ban ikīdi

「自分へ(に)正直に生きる」

・du:ŋkai idzdu iʒʒi

*naraŋkai idzdu iʒʒi

「自分に気合を入れる」

(5)-2.〈複数人称「自分たち」[du:ta] [narata]の場合〉

複数人称は〈自分たち〉[du:ta] [narata] + 〈へ〉[ŋkai] → [to:ta ŋkai]. [narata ŋkai] になる。

・du:taŋkai dzo:ka:nan fiʃfi

*naraŋkai dzo:ka:nan fiʃfi

「自分たちへ(に)良いようにしなさい」

・pītuŋkainu dasīkja: ato: du:ŋkaidu kīsi

*pītuŋkainu dasīkja: ato: naraŋkaidu kīsi

「他人への慈善は後は自分へ(に)帰って来る」

(6)指示代名詞[kui]「これ」、[ui]「それ」、[kai]「あれ」が人を表す時助詞[ŋkai]「へ」のつく例

野原方言では、指示代名詞の中の事物を示す「これ」「それ」「あれ」は人を表す代名詞としても用いられ、

〈指示代名詞が人を示す時〉

①近称「kui」「これ」に[へ][ŋkai]がつく用例

〈一称に助詞[ŋkai]「へ」がつく〉

[kui] + [へ] [ŋkai] → [kui ŋkai] となる。

・kuinŋkaidu mutʃi piita:

「これへ(に)持って行った」

・kuinŋkai siɡutu: siɡutu: ʃimiro:mai mainŋkaija agagan

「これへ(に)仕事をさせても進展はない」

〈複数の人を示す場合〉

[kui]「これ」+[ta]「た」の形[kuita]に助詞[ŋkai]「へ」が接続する形[kuitaŋkai]で表れる

・kuitaŋkai fi:gamanu munu: irabi

「これたちへ(に)送る物を選ぶ」

・kuitaŋkai fai:ttikara vva: faijo:

「これたちへ(に)食べさせてから君は食べてよ」

②中称「ui」「それ」に[ŋkai]「へ」がつく用例

・uinŋkai mutʃiikizza vvaga kata:kisai

「それへ(に)持っていくので君の役目です」

・uinŋkai jumsitsika: pukarasīsadu siʃi

「それへ(に)読ませたら喜ぶ」

〈複数形は[ui]「それ」+[ta]「た」の形[uita]に助詞[ŋkai]「へ」が接続する形[uitaŋkai]

「それたちへ」で表れる〉

・uitaŋkai m:na бага dusinukja:

「それたちへ(に)みんな私の友達だ」

・bu:gijuba: uitaŋkai m:na ibita:

「砂糖キビはこれたちへ(に)皆植えた」

③遠称「kai」「あれ」に[ŋkai]「へ」がつく用例

遠称「あれは」人を表す場合、前述した人称代名詞[kai]「かれ」と同じような用法を表す。

・kainŋkai asipiga dzu:ti: andzaita: sugadu mbati u:ta:

「あれへ(に)遊びに行こうと誘ったが断われた」

・kainŋkai tavkja: ku:ti: aita:sugadu ffa: sa:ri: kifuta:

「あれへ(に)一人で来いと言ったけど子どもを連れて来ていた」

*指示代名詞の遠称「kai」「あれ」の複数形は「kai」「あれ」+[ta]「た」→「あれたち」「あれら」「kaita」である。

・kaitaŋkaidu daidzina panasinu a:

「彼たちへ(に)大切な話がある」

・kaitapkai kaʃi: ʃimidi

「彼たちへ(に)手伝ってもらおう」

④不定称 [ndʒi] 「どれ」に [ŋkai] 「へ」がつく用例

人を表す指示代名詞の不定称には「ndʒi」「どれ、どちら」に[ŋkai]「へ」がつく用例。

〈普通は指示代名詞の不定称は人を表す表現に用いる要素はなく [ndʒi] 「どれ」に替わって [to:] 「だれ」が用いられる〉

・ndʒiŋkaiga tanumgamatajaba

「どちらへ(に)頼むのか」

*to:ŋkaiga tanumgamatajaba

「誰へ(に)頼むのか」

・adzatu ututunu ndʒiŋkaiga jumipkai ikja:

「兄と弟のどれへ(に)嫁に行くのか」

*adzatu ututunu to:ŋkaiga jumipkai ikja:

「兄と弟の誰へ(に)嫁に行くのか」

6. 格助詞「と」について

(1) 自称「わたし」 [ban] について

〈一人称「わたし」の場合〉

〈わたし〉 [ban] + 格助詞 [to] 「と」 → [bantu] になる。

〈 [ban] 「わたし」に格助詞 [tu] 「と」が接続した時の用例〉

・bantu ma:tsiki iki

「私と一緒に行く」

・bantu ikitsika: umufiʃidara

「私と行くと楽しいぞ」

(1)-2. 複数人称は「わたし」 [ban] + [ta] → 〈私たち〉 [banta] になる。

・bantatu asipiga iki

「私たちと遊びに行く」

・bantatu sigutu: sisitsika:

pja:pja:tidu ʃimai

「私たちと仕事をすると早く終わる」

(2) 対称「あなた」 [vva] について

〈一人代名詞について〉

(2)-1. 対称代名詞〈あなた、君〉 [vva] について

〈あなた〉 [vva] + [tu] → [vvatu] になる。

◎ [vva] 〈あなた、君〉に格助詞 [tu] 「と」が接続した時の用例

・vvatu ma:tsiki ikadi

「あなたと一緒に行く」

・vvatu a:gu: andzi

「君と歌を歌う」

(2)-2. 〈複数人称「あなたたち」の場合〉

複数人称は〈あなたたち〉 [vvata] + [tu] 〈と〉 → [vvatatu] になる。

・vvatatu idjo:mai nagja:fu burisaiga

「あなたたちと会うのも久しぶりだ」

・vvatatu ma:tsiki tu:tsikidaka: naran mununudu a:

「君たちと共に伝えなければならないことがある」

(3) 他称「かれ」について

〈一人代名詞について〉

(3)-1. 対称代名詞〈かれ〉 [kai] について

〈かれ〉 [kai] + [tu] → [kaitu] になる。

◎ [kai] 〈かれ〉に格助詞 [tu] 「と」が接続した時の用例

・kurju: kaitu ukurattidu бага iki 「これを彼と送る為に僕が行く」

・kaitu tivvi: turasi

「彼と投げて渡す」

(3)-2. 〈複数人称「かれたち」の場合〉

複数人称は〈かれたち〉 [kaita] + [tu] 「と」 → [kaitatu] になる。

・kaitatu panafibadu dzo:ka:

「彼たちと話した方が良い」

・kaitatu ukuĩmunu: irabĩ

「彼たちと贈り物を選ぶ」

(4) 疑問称「だれ」 [to:] について

〈一人代名詞について〉

(4)-1. 対称代名詞〈だれ〉 [to:] について

〈だれ〉 [to:] + [tu] 「と」 → [to:tu] になる。

◎ [to:] 〈だれ〉に格助詞 [tu] 「と」が接続した時の用例

・to:tuga ukuĩgamatanu ni:jaba: mitfi:
ikĩgamatajaba

「誰と送るべき荷物を運ぶのか」

・to:tuga panafibaga dzo:ka:gara sĩaĩĩ
「誰と話せば良いか分からない」

(4)-2. 〈複数人称「だれたち」 [to:ta:] の場合〉

複数人称は〈だれたち〉 [to:ta] + [tu] 「と」
→ [to:tatu] になる。

・to:tatu idjaibaga dzo:kaiba
「誰たちと遭えば好いか」

・ukuĩ ni:ja to:tuga sĩko:ĩgamatajaba
「送る荷物は誰と準備するか」

(5) 反射代名詞「自分」 [nara] [du:] について

〈一人代名詞について〉

(5)-1. 対称代名詞〈自分〉 [nara] [du:] について

[nara] [du:] + [tu] 「と」 → [nara] [du:]
[naratu] [du:tu] になる。

◎ 〈自分〉 [nara] [du:] に格助詞 [tu] 「と」
が接続した時の用例

・futagajabadu adza: du:tu mipananu
junugu:sai

＊futagajabadu adza: naratu mipananu
junugu:sai

「双子だから兄は自分と顔が同じ」

・pumiraittsika: du:tu adzaga na:gĩĩdu

naĩ

＊pumiraittsika: naratu adzaga na:gĩĩdu
naĩ

「褒められると自分と兄の励みになる」

(5)-2. 〈複数人称「自分たち」 [narata] [du:ta:] の場合〉

複数人称は〈自分たち〉 [du:ta] [narata] +
[tu] 「と」 → [to:tatu] . [naratatu] になる。

・du:tatu nnainu sĩgutunudu na:ĩ

＊naratatu nnainu sĩgutunudu na:ĩ
「自分たちと適した仕事がない」

・du:tanakai du:tafi: na:gĩ: ikĩdi

＊naratanakai du:tafi: na:gĩ: ikĩdi

「自分たちへ(に)自分たちで励まして生きる」

(6) 指示代名詞 [kui] 「これ」、[ui] 「それ」、 [kai] 「あれ」が人を表す時、助詞 [tu] 「と」 のつく例

野原方言では、指示代名詞の中の事物を示す
「これ」「それ」「あれ」は人を表す代名詞と
しても用いられ、

〈指示代名詞が人を示す時〉

① 近称「kui」「これ」に助詞 [tu] 「と」がつく 用例

〈一人称に助詞 [tu] 「と」がつく〉

[kui] + [tu] 「と」 → [kuitu] となる。

・kuitu mutfi piĩta:

「これと持って行った」

・kuitu sĩguto:: makasaĩ

「これと仕事は任せられない」

①-2 〈複数の人を示す場合〉

[kui] 「これ」 + [ta] 「た」 → [kuita] に助
詞 → [tu] 「と」が接続する形 [kuitatu] で表
れる

・kuitatu buduĩzzu nara:satʃtʃba vva:
mi:ru

「これたちと踊を教えるので君は見なさい」

・kuitatu faittikara vva: sadari: piri
「これたちと食べてから君は先に行け」

②中称「ui」「それ」に助詞[tu]「と」がつく [uitu] の用例

・uitu mutʃipīigamatajaba vva: jukui
「それと持っていくので君は休め」

・uitu jumi kīkafi
「それと読んで聞かせなさい」

②-2 複数形は [ui] 「それ」 + [ta] 「た」 → [uita] に助詞[tu]「と」が接続する形[uitatu] で表れる

・uitaptu mutʃi:ja ikattam
「それたちと持って行かなかった」

・bu:gijuba: uitatu m:na fi:ta:
「砂糖キビはこれたちと皆食べさせた」

③遠称[kai]「あれ」に助詞[tu]「と」がつく用例

[kai]「あれ」は人を表す場合、前述した人称代名詞[kai]「かれ」と同じような用法を表す。

・kaitu asīpīga piitaso: to:jaba
「あれと遊びに行ったは誰か」

・karja: kaitudu ffa: sa:ri: kifū:ta:
「彼はあれと子どもを連れて来ていた」

③-2 指示代名詞の遠称[kai]「あれ」の複数形は[kai]「あれ」 + [ta] 「た」 → 「あれたち」 [kaita] である。複数形[kaita]「かれたち」に格助詞[tu]「と」のつく用例

・tavkja: uradanafi: kaitatu asīpīga piri
「一人で居ないであれたちと遊びに行きなさい」

・kaitatu o:ja: sīsītsika: go:ridusī「あれたちと仲違いすると苦勞する」

④不定称[ndgi]「どれ」に[tu]「と」がつく

指示代名詞の不定称には「ndgi」「どれ、どちら」に[tu]「と」がつく用例。

・karja: ndzītuga utsutstsajaba
「彼はどちらと親戚か」

・futa:i u:suga ndzītuga ma:tsīki
naigamatajaba

「二人いるけれどどちらと結婚するのか」

〈ほとんど[ndgi]「どれ」が使われことはなく [to:]「だれ」が使われる〉

(7) 反射代名詞「自分」[du:] [nara] について

〈一人代名詞について〉

(7)-1. 対称代名詞〈自分〉[nara] [du:] について

[nara] [du:] 「自分」 + [tu] 「と」 → [nratu] [du:tu] 「自分と」になる。

◎ 〈自分〉[nara] [du:] に格助詞[tu]「と」が接続した時の用例

・kaita: du:taga kututu m:naga kutu: tʃa:ndu kaggaiju:

*kaita: narataga kututu m:naga kutu:tʃa:ndu kaggaiju:

「彼らは自分のこととみんなの事だけ考えている」

・du:ga kututu pītunu kutu:ba: bakiru
*naraga kututu pītunu kutu:ba: bakiru
「自分の事と他人の事は分けなさい」

(7)-2. 〈複数人称「自分たち」[du:ta:] の場合〉

複数人称は〈自分たち〉[du:ta] [narata] + [tu] 「と」 → [to:tatu] [naratatu] 「自分たちと」になる。

・du:tatu kaitato: sīsījo:nudu tʃigo:
*naratatu kaitato: sīsījo:nudu tʃigo:

「自分たちと彼らとはのやり方が違う」

・jamaṅkai nu:izza du:ta:tunu
tatakaisaiga

*jamaṅkai nu:izza narata:tunu
tatakaisaiga

「登山は自分たちとの戦いだ」

7. 格助詞「より」について

(1) 自称「わたし」について

〈一人称「わたし」の場合〉

〈わたし〉[ban]+〈より〉[juizza]→[banjuizza]

「わたしより」になる。

◎ [ban] 「わたし」に格助詞 [juizza] 「より」が接続した時の用例

・ karja: banjuizza sadaridu piita:

「彼は私より先に行った」

・ banjuizza taka:takanu ja:nu tsitsinu

kuinubuī

「私より高い屋根の上のこいのぼり」

(1)-2. 複数人称は〈わたしたち [banta]〉+〈より〉[juizza]→〈私たちより〉[bantajuizza]になる。

・ kaitaga siiguto: bantajuizza

maipkaiagaki:du u:

「彼たちの仕事は私たちより捗っている」

・ bantajuizza mugi: kaitanna urja:

firaip

「私たちより不器用な彼らにはそれは出来ない」

(2) 対称「あなた」について

〈一人代名詞について〉

(2)-1. 対称代名詞〈あなた、君〉[vva]について

〈あなた〉[vva]+[juizza]「より」→[vvajjuizza]

「あなたより」になる。

◎ [vva] 〈あなた、君〉に格助詞 [juizza] 「より」が接続した時の用例

・ vvajjuizza bagadu dikibutsidara

「君より僕の方が優れている」

・ itsimai asipju: vvajjuizza bagadu

patarakju:dara

「何時も遊んでいる君より僕の方が働いている」

(2)-2. 〈複数人称「あなたたち」の場合〉

複数人称は〈あなたたち〉[vvata]+[juizza]

「より」→[vvatajuizza] 「君たちより」になる

・ vvatajuizza bantagadu sadari ki sīta:

「君たちより僕らが先に来た」

・ vvatajuizza patarakī pītunukja: urap

「君たちより働く人はいない」

(3) 他称「かれ」について

〈一人代名詞について〉

(3)-1. 対称代名詞〈かれ〉[kai]について

〈かれ〉[kai]+[juizza]「より」→[kaijuizza]

「かれより」になる。

◎ [kai] 〈かれ〉に格助詞 [juizza] 「より」が接続した時の用例

・ kaijuizza pja:pja:ti: sīkikirubadu

dzo:ka:

「彼より早めに始めた方が良い」

・ mi:ju:rja:mai kaijuizza vvagadu

pja:ka:

「見ている彼より君の方が早い」

(3)-2. 〈複数人称「かれたち」の場合〉

複数人称は〈かれたち〉[kaita]+[juizza]

「より」→[kaitajuizza] 「彼たちより」になる。

・ kaitajuizza pja:pja:tidu idikisīta:

「彼たちよりは早めに出てきた」

・ kunu mtstsuba: kaitajuizza bantagadu

fiffi

「この道は彼たちより僕らが知っている」

(4) 疑問称「だれ」[to:]について

〈一人代名詞について〉

(4)-1. 対称代名詞〈だれ〉[to:]について

〈だれ〉[to:]+[juizza]「より」→[to:juizza]

「だれより」になる。

◎ [to:] 〈だれ〉に格助詞 [juizza] 「より」が接続した時の用例

・ to:juizzamai vvaṅkaidu purja:

「誰よりも君のことが好きだ」

• bagadu to:juizzamai ujo:ba: bagadu
mibakarju:

「僕が誰よりも親の面倒は私が見ている」

(4)-2. <複数人称「だれたち」 [to:ta:] の場合
>

複数人称は <だれたち、だれら> [to:ta:] +
[juizza] 「より」 → [to:tajuizza] 「誰たち
より」になる。

• vvata: to:tajuizza sadarin kisitarja:
「君たちは誰たちより先に来たか」

• bantaga a:go: totajuizzaga
dzo:dzigara sisaiŋ

「歌は誰たちより上手いか分からない」

(5) 反射代名詞「自分」 [du:] [nara] につ
いて

<一人代名詞について>

(5)-1. 対称代名詞 <自分> [nara] [du:] につ
いて

[nara] [du:] 「自分」 + [juizza] 「より」
→ [narajuizza] [du:juizza] 「自分より」に
なる。

◎ <自分> [nara] [du:] に格助詞 [juizza]

「より」が接続した時の用例

* narajuizza kaigadu kutandju:

「自分より彼が疲れている」

• karja: du:juizza takinudu takaka:
「彼は自分より背が高い」

(5)-2. <複数人称「自分たち」 [du:ta:] [narata]
の場合>

複数人称は <自分たち> [du:ta] [narata] +
<より> [juizza] → [do:tajuizza] .

[naratajuizza] になる。

* natajuizza kaitaŋkai tanumibadu
dzo:ka:

「自分たちより彼たちに頼んだ方がよい」

• du:tajuizza sadari idipiita:so: to:jaba

「自分たちより先に出かけたのは誰だ」

(6) 指示代名詞 [kui] 「これ」、[ui] 「それ」、
[kai] 「あれ」が人を表す時、助詞「より」 [juizza]
のつく例

野原方言では、指示代名詞の中の事物を示す
「これ」「それ」「あれ」は人を表す代名詞と
しても用いられ、

<指示代名詞が人を示す時>

① 近称「kui」「これ」に「より」 [juizza] がつ
く

<一人称に助詞 [より] 「juizza」がつく>

[kui] 「これ」 + [juizza] 「より」 → [kuijuizza]
「これより」となる。

• kuijuizza bagadu jo:daki mutai
「これより私が多く持てる」

• kuijuizza siŋutu: firaidaka: jamidi
「これより仕事が出来なければ止める」

①-2 <複数の人を示す場合>

[kui] 「これ」 + [ta] 「た」の形 [kuita] 「こ
れたち」に助詞「より」 [juizza] が接続する
形 [kuitajuizza] 「これたちより」で表れる。

• kuitajuizza sadari piratŋfiba vvamai
ma:tsiki ku:

「これたちより先に帰るので君も一緒に来い」

• kuitajuizza atukara fai
「これたちより後から食べなさい」

② 中称「ui」「それ」に [juizza] 「より」が
つく

• uijuizza бага mutfiikibadu dzo:ka:
「それより私が持って行った方がよい」

• uijuizza бага jumikikaŋibadu kiki
「それより私が読み聞かせた方が聞く」

②-2 <複数形は [ui] 「それ」 + [ta] 「た」の
形 [uita] 「それたち」に助詞 [juizza] 「よ
り」が接続する形 [uitajuizza] 「それたちよ
りは」で表れる>

• uitajuizza m:nato: bagadu dusidara

「それたちより皆とは私の方が友達だ」

• bu:gijuba: uitajuizza bantagadu ibita:

「砂糖キビはこれたちより僕たちが植えた」

③遠称 [kai] 「あれ」に [ju izza] 「より」がつく

これは人を表す場合、前述した称代名詞[kai]「かれ」と同じような用法を表す。

• kaijuizza aga:tagami asipiga ikita:

「あれより遠くまで遊びに行った」

• kaijuizza jo:daki ffa: nasita:

「あれより沢山子どもが産んだ」

③-2 指示代名詞の遠称「kai」「あれ」の複数形は「kai」「あれ」+ [ta]「た」→「あれたち」「あれら」「kaita」である。

• kaitajuizza patarakadaka: jamifimi raidusi

「あれたちより働かないと首になる」

• banta: kaitajuizza gu:ja m tji:

「僕たちは彼らより仲間は多い」

④不定称 [ndgi] 「どれ」に「より」 [juizza] がつく

指示代名詞の不定称には「ndgi」「どれ、どちら」に「より」[juizza]がつく用例。

• kaitaga ndgijuizzaga

• vvaga ffa: takja: taka:taka

「彼らのどちらより君の子どもは背が高い」

• vvataga ndgijuizzamai бага ja:ja aga:tasai

「君らのどちらよりも僕の家は遠い」

8. 格助詞「から」について

(1) 自称「わたし」について

〈一人称「わたし」の場合〉

〈わたし〉 [ban] + 〈から〉 [kara] → 〈私から〉 [bankara] になる。

◎ [ban] 「わたし」に格助詞「から」 [kara] が接続した時の用例

• bankara vvakai fi:di

「私から君に上げる」

• bankara mba:danafi: uki

「私から取り上げないでくれ」

(1)-2. 複数人称は〈わたしたち〉 [banta] + 〈から〉 [kara] → 〈ぼんたから〉 [bantakara] になる。

• bantakara tusiva:ra: ikjara:nu

「私たちから年上は少ない」

• bantakara aigamatanu kuto: na: ŋ

「私たちから言うべきことはない」

(2) 対称「あなた」について

〈一人代名詞について〉

(2)-1. 対称代名詞〈あなた、君〉 [ban] について

〈あなた〉 [vva] + 〈から〉 [kara] → 〈あなたから〉 [vvakara] になる。

◎ [vva] 〈あなた、君〉に格助詞「から」 [kara] が接続した時の用例

• vvakara izzita: fuko: kisaip

「君から貰った服は着られない」

• vvakara ukita: uggizzuba: bafij

「あなたから受けた恩義は忘れない」

(2)-2. 〈複数人称 [vvata] 「あなたたち」「君たち」の場合〉

複数人称は〈あなたたち〉 [vvata] + 〈から〉 [kara] → 〈あなたたちから〉 [vvatakara] になる

• vvatakara andzaita: kutu:ba bafij

「あなたたちから言われたことは忘れない」

• vvatakara izzita: munu:ba:

atarakasu:di

「君たちから貰ったものは大切にする」

(3) 他称「かれ」について

〈一人代名詞について〉

(3)-1. 対称代名詞〈かれ〉 [bai] について

〈かれ〉 [kai] + 〈から〉 [kara] → 〈かいか

ら) [kaikara] になる。

◎ [kai] 〈かれ〉に格助詞 [kara] 「から」が接続した時の用例

・kaikara ukurai kīsita: tigamju:ba:
jumdu sīta:

「彼から送られてきた手紙は読んだ」

・kīnu kaikara kīkita: vvaga uisa:
fuwasaiga

「昨日彼から聞いた君のうわさは心配だ」

(3)-2. 〈複数人称 [kaita] 「かれたち」の場合〉

複数人称は〈かれたち〉[kaita]+〈から〉[kara]
→〈かれたちから〉[kaitakara] になる。

・kaitakaranu izzaija mbja:ip
「彼たちからの批判は耐えられない」

・nnamanu бага a:muno: kaitakara
kafi:nu a:ta: ukagisai

「今の私があるのは彼らから援助があったからだ」

(4) 疑問称「だれ」 [to:] について

〈一人代名詞について〉

(4)-1. 対称代名詞 〈だれ〉 [to:] について
〈だれ〉 [to:] + 〈から〉 [kara] → 〈誰から〉
[to:kara] になる。

◎ [to:] 〈だれ〉に格助詞「kara」が接続した時の〈誰から〉 [to:kara] 用例

・ukuimuno: to:kara izziro:mai pukara
sīmunusai

「贈り物は誰から貰っても嬉しい」

・kurumaṅkaija to:karaga sadari
nu:igamatajaba

「車には誰から先に乗るのか」

〈複数人称「だれたち」 [to:ta] の場合〉

(4)-2. 複数人称は〈だれたち〉 [to:ta] + 〈から〉 [kara] → 〈誰たちから〉 [to:takara] になる。

・m:ma to:takara izzita: munujaba

「芋は誰たちからの貰い物か」

・sadarja: to:takara abiribaga
dzo:karja:

「先に誰たちから呼べばよいか」

(5) 反射代名詞「自分」 [du:] [nara] について

〈一人代名詞について〉

(5)-1. 対称代名詞 〈自分〉 [du:] [nara] の場合

〈自分〉 [nara] [du:] + 〈から〉 [kara] →
[自分から] [narakara] [du:kara] になる。

◎ 〈自分〉 [nara] [du:] に格助詞「から」 [kara]
が接続した時の用例

・du:kara na:ju andzibadu dzo:ka:
「自分から名乗った方が良い」

*nara:kara sadari: iki matfu:ibadu
dzo:ka:

「自分から先に行って待って居た方が良い」

(5)-2. 〈複数人称「自分たち」 [du:] [nara]
の場合〉

複数人称は〈自分たち〉 [du:ta] [narata] +
〈から〉 [kara] → 〈自分たちから〉 [to:takara]
[naratakara] になる。

・sudzanukja:ṅkaija du:takara kanamaizzu
sagi

「先輩には自分たちから挨拶する」

*kafi:juba: naratakara sadarin nari:
sīsī

「加勢は自分たちから率先してする」

(6) 指示代名詞 [kui] 「これ」、[ui] 「それ」、 [kai] 「あれ」が人を表す時、助詞 [kara] 「から」のつく例

野原方言では、指示代名詞の中の事物を示す「これ」「それ」「あれ」は人を表す代名詞としても用いられ、

〈指示代名詞が人を示す時〉

① 近称「kui」「これ」に格助詞「から」 [kara]

がつく

〈一人称 [kui] に助詞 [から] 「kara」がつく〉

[kui] + 「から」 [kara] 「から」 → 「これから」 [kuikara] となる。

・kuikara ɪzɪdu mutʃi piita:

「これから貰って持って行った」

・kuikara siɣutu: ʃi ʃʃiti: andzaitaiba
baga su:di

「これから仕事をやれと言われたので僕がするよ」

①-2<複数の人を示す場合>

[kui] 「これ」 + [ta] 「た」の形 [kuita] 「これたち」に助詞「から」 「kara」が接続する形 [これたちから] 「kuitakara」で表れる。

・kuitakara sadarin buduī gamatajaba
vva: mi:ru

「これたちから先に踊るので君は見なさい」

kuitakara faittikara vva: faijo:

「これたちから食べてから君は食べてよ」

②中称「ui」 「それ」に格助詞[から] 「kara」がつく

・baga uikara tui: mutʃipīgamatajaba
vva: jukui

「僕がそれから取って持っていくので君は休め」

・sīsain dzī:juba: uikara narai:

jumijo:

「分からない字はそれから聞いて 読みなさいね」

②-2<複数形は [ui] 「それ」 + [ta] 「た」の形 [uita] 「それたち」に格助詞[から] 「kara」が接続する形 [uitakara] 「それたちから」で表れる。

・uitakara tidairaidu pukara si:pukara
siu:ta:

「それたちから奢られて楽しかった」

・bu:gijuba: uitakara sapu: ɪzɪdu

m:na ibita:

「砂糖キビはこれたちから苗を貰って皆植えた」

③遠称 [kai] 「あれ」に格助詞[から] 「kara」がつく

これは人を表す場合、前述した称代名詞[kai] 「かれ」と同じような用法を表す。

・kaikaradu asipiga ikaditi: andzaita:

「あれから遊びに行こうと誘われた」

・kaikaradu ffo:mai sa:riku:ti: andzaita:

「あれから子どもも連れて来いと言われた」

③-2 指示代名詞の遠称「kai」「あれ」の複数形は「kai」「あれ」 + [ra] 「ら」 → 「あれたち」「あれら」「kaita」である。

・kaitakara mi:tsikiraitsika: kunu atudu
go:ri

「あれたちから睨まれたら今後苦勞する」

・kurja: kaitakara mutasaita: munusai

「これはあれたちから持たされたものだ」

④不定称 [ndzi] 「どれ」に格助詞[から] 「kara」がつく

指示代名詞の不定称には「ndzi」「どれ、どちら」に格助詞[から] 「kara」がつく用例。

・uman narabju: ndzikaraga vvaga ffajaba

「そこに並んでいるどれからが君の子どもか」

・uman biɣzu: ndzikaraga vvaga

utsutstsajaba

「そこに座っているどちらからが君の親戚か」

9. 格助詞「で」について**(1) 自称「わたし」について**

〈一人称「わたし」の場合〉

〈わたし〉 [ban] + 〈で〉 [ʃi:] → 「私で」 [banʃi:] になる。

◎ [ban] 「わたし」に格助詞 [で] 「ʃi:」が接続した時の用例

・banʃi: dzo:bunatsika: kafi: su:di 「私
で良ければ手伝います」

• nidzu:ja banʃi: taro:du si

「人数は僕で足りませう」

(1)-2. 複数人称は〈わたしたち〉[banta]+〈で〉
[ʃi:] → 〈私たちで〉 [bantafʃi:] になる。

• kurju:ba: bantafʃi: su:di

「これは私たちでやります」

• karju:ba: bantafʃi: ku sin naradi

「彼は私たちで支える」

(2) 対称「あなた」について

〈一人代名詞について〉

(2)-1. 対称代名詞〈あなた、君〉[vva] について

〈あなた、君〉[vva]+〈で〉[ʃi:] → 〈あなたで〉[vvaʃi:] になる。

◎ [vva] 〈あなた、君〉に格助詞 [ʃi:] 「で」が接続した時の用例

• kafi:ja vvaʃi: dzo:buŋ

「手伝いは君で良い」

• kurju:ba: vvaʃi: ʃiʃfitti nukuizsuba:
baga siʃi

「これは君でやって残りは僕がやる」

(2)-2. 〈複数人称「あなたたち」の場合〉

複数人称は〈あなたたち〉[vvata]+〈で〉[ʃi:]
→ 〈君たちで〉[vvataʃi:] になる

• ni:juba: vvataʃi: mutʃipiri

「荷物は君たちで持って行け」

• siʃutu:ba: vvataʃi: juima:ro:ʃi:
ʃiʃi

「仕事は君たちで支え合ってやれ」

(3) 他称「かれ」について

〈一人代名詞について〉

(3)-1. 対称代名詞〈かれ〉[kai] について

〈かれ〉[kai]+〈で〉[ʃi:] → 〈彼で〉[kaiʃi:]
になる。

◎ [kai] 「かれ」格助詞「で」[ʃi:] が接続した時の用例

• kaiʃi: dzo:buŋatsika: sa:ri: piri 「彼

で良ければ連れていけ」

• kafi:ja kaiʃi: maŋo:du siŋa:

「加勢は彼で間に合うか」

(3)-2. 〈複数人称「かれたち」の場合〉

複数人称は〈かれたち〉[kaita]+〈で〉[ʃi:]
→ 〈彼たちで〉[kaitaʃi:] になる。

• kunu siʃutu:ba: kaitaʃi:

tudzimikja:gami ʃimidi

「この仕事は彼たちで終わりまでさせる」

• uman a:su:ba: kaitaʃi: mutʃi

pirasadi

「そこにあるのは彼たちで持って行かせる」

(4) 疑問称「だれ」[to:] について

〈一人代名詞について〉

(4)-1. 対称代名詞〈だれ〉[to:] について

〈だれ〉[to:] + 〈で〉[ʃi:] → 「誰で」[to:
ʃi:] になる。

◎ 〈だれ〉[to:] に格助詞〈で〉[ʃi:] が接続した時の用例

• unu siʃutu:ba: to:ʃi:ga siʃigamatajaba

「その仕事は誰で進めますか」

• tara:nsu:ba: to:ʃi:ga umitʃtʃa:

「欠員は誰で埋めますか」

(4)-2. 〈複数人称「だれたち」[to:ta:] の場合〉

複数人称は〈だれたち〉[to:ta]+〈で〉[ʃi:]
→ 〈誰たちで〉[to:taʃi:] になる。

• siʃisunu uran siʃutu:ba: to:taʃi:ga
su:digara kangaidi

「やる人のいない仕事は誰たちでやるか考える」

• to:taʃi:ga ʃikininnu mutʃigamatagara
kimi

「誰たちで責任を持つか決める」

(5) 反射代名詞「自分」[du:] [nara] について

〈一人代名詞について〉

(5)-1. 対称代名詞〈自分〉[du:] [nara] について

[nara][du:] + 〈で〉[fi:] → [自分][nara:fi:]
[du:fi:] になる。

◎ 〈自分〉[du:] [nara] 格助詞「で」[fi:]
が接続した時の用例

・ du:ga kutu:ba: du:fi: si:si

「自分の事は自分です」

* naraga si:si:busi kutu:ba: naragadu
dga:ka fi:fu:saiga

「自分でやりたいことは自分がよく知っている」

(5)-2. 〈複数人称「自分たち」[du:ta] [narata]
の場合〉

複数人称は〈自分たち〉[du:ta] [narata] +
〈で〉[fi:] → [du:ta:fi:] . [narata:fi:] に
なる。

・ si:saidaka: du:ta:fi: kangai

「分からなければ自分たちで考える」

* narata:fi: gundan si:si:gatsina si:si

「自分たちで論議しながらする」

(6) 指示代名詞 [kui] 「これ」、[ui] 「それ」、
[kai] 「あれ」は格助詞〈で〉[fi:] がつく
場合は人表す表現はできない

野原方言では、指示代名詞の中の事物を示す
「これ」「それ」「あれ」は人を表す代名詞と
しては用いられない。

主要参考文献

島尻 澤一

1983 「琉球宮古方言の助詞 一野原方言の助詞 ga
と nu を中心に一」琉大国語 2 集 琉球大学国語学
研究会

1984 「琉球方言宮古野原方言の音韻の研究」琉大
国語 3 集 琉大国語学研究会

2021 「宮古城辺方言の音韻の研究—旧城辺町史の
ための調査資料中心に一」宮古島市総合博物館紀
要・第 25 号

2011 「宮古島市西里方言の音韻」宮古の自然と文
化・第 3 集・宮古の自然と文化を考える会

2022 宮古島市城辺友利方言の音韻の研究 ネフ
スキー記念文集編纂委員会

富浜 定吉

2013 「伊良部方言辞典」沖縄タイムス社
国語学会編

昭和 30 年「沖縄語学辞典」東京堂出版

仲宗根 政善

昭和 58 年「沖縄今帰仁方言辞典」角川書店
宮城 信勇

2003 「石垣方言辞典」沖縄タイムス社
社・研究者

橋本 進吉

昭和 44 年「助詞・助動詞の研究」岩波書店
西田 直敏

1977 「助詞(1)?岩波講座・日本語 7 文法Ⅱ」岩波
書店

安田 章

1977 「助詞(2)?岩波講座・日本語 7 文法Ⅱ」岩波
書店

名嘉真 三成

2000 「琉球方言の意味論」株式会社ルック
山田 実

昭和 56 年「奄美・与論方言の体言の語法」第一書
房

野原 三義

昭和 61 年「琉球方言助詞の研究」武蔵野書院

1998 「新編・琉球方言助詞の研究」沖縄学研究所
本永 守靖

1994 「琉球圏生活語の研究」春秋社
城辺町教育委員会

2003 ぐすくべの方言語彙集(上・下)
平成 2 年 城辺町史 第 5 巻民話編

2003 城辺町史 第 6 巻歌謡編

法政大学沖縄文化研究所

1985 沖縄文化研究 11 法政大学沖縄文化研究

所編

佐久間 鼎

昭和 27 年 「現代日本語法の研究」 恒星社

厚生閣